

足音

混乱の夜明は金属の偏光を待らせ
明らかなるものはますます明瞭に
かすかなるものはますますかすかに
そのことに人々は狂喜しはじめ

^{カオス}混沌より抜け出さんと吼え叫ぶ

群衆は足並みを揃えて突進する
我も、我も、そして我も、と

私はひとりうち棄てられた廢墟に残り
人々から浴びせられた言葉を握りしめる

「弱虫^め奴が、この懷疑のかたまり奴が」

「何故理想へ向って突き進まないのだ」

「見るがいい！我らの力に満ちた勝利を！」

だが私はここに残っていたかった
単調にも似たこのあたりまえの世界に

私はそっと抱き締めていたかった
おぼろげな、そしてかすかなものを

穏やかな、そして暖かな^{いのち}生命を

喜びは喜びとして存在し

哀しみが哀しみとして存在し

何ものも浅薄な激情に塗り潰されることのない

ありのままのゆるやかな流れの中に

常に深い謎に対峙し続けたままのような

ありのままのぼんやりとした空気の中に

(1984.8.15)